

## 風邪症候群から伝染性単核球症を見つける

成人の咽頭炎の原因は5～15%がβ溶連菌、5%がその他の細菌で残りがいろいろなウイルスといわれています。このウイルス性の咽頭炎をいわゆる風邪症候群と呼びますが、伝染性単核球症 (infectious mononucleosis ; IM ) もウイルス性の咽頭炎の一つで頻度的にはウイルス性の咽頭炎の1%以下とされています<sup>1)</sup>。伝染性単核球症は主に Epstein-Barr ( EB ) ウイルスに未感染の成人がこれらのウイルスに初感染した時の症状です。伝染性単核球症は他にサイトメガロ、風疹、アデノ、コクサッキーA型、B型、HHV—6 や HHV—7 でも起こるといわれています<sup>2)</sup>。

伝染性単核球症の主な症状は発熱、頸部リンパ節腫脹、咽頭痛でありいずれも90%以上で認められます。眼瞼浮腫は比較的特徴的症状と考えられています。両側性の滲出性扁桃腺炎も半数以上の症例で見られ1/3の症例では、細菌感染を合併します。通常診察では細菌性の扁桃腺炎との鑑別が難しく、見逃されている可能性も高いと思われます。しかし、伝染性単核球症は他の咽頭扁桃炎と厳密に鑑別する必要があります。その理由は①伝染性単核球症にペニシリンを投与すると30~100%と高率に薬疹を生じるからです。セフェム系は諸説ありますが、やはり若干薬疹の頻度が高いようで伝染性単核球症が疑われたらβラクタム系の抗生剤は避けたほうが良いようです。②伝染性単核球症の場合、病期期間が1ヶ月以上に及ぶこともあり、またEBウイルスが原因の時には0.2~0.3%に碑破裂の合併症があり運動制限をする必要があるからです。③伝染性単核球症の原因の中でサイトメガロウイルスやトキソプラズマの場合は妊婦と接触しない工夫が必要となるからです。④伝染性単核球症の中には急性HIV感染症があるからです<sup>3)</sup>。順天堂大学総合診療科を受診した伝染性単核球症のうち3%はHIVが原因であったとする報告もあります<sup>4)</sup>。しかし急性HIV感染症は診断が難しく、ハイリスクグループと認識しながらもプライマリケアでは25%しか診断されなかったという報告もあります<sup>4)</sup>。

以上のような理由から風邪症候群で受診した患者さんの中で、できるだけ身体所見の段階で伝染性単核球症を区別して診断したいところです。口蓋の点状出血はEBウイルスに対して特異度95%とかなり確実な所見ですが、感度は25~35%とよく見られる所見ではありません<sup>1)</sup>。後頸部のリンパ節腫脹はかなり特徴的で陽性尤度比\*3.1と高く、脾腫を確認できればかなりEB感染を特定できると思われます<sup>5)</sup>。しかし、EBウイルスによる伝染性単核球症の場合、加齢とともに臨床的特徴はみられなくなり40歳以上では頸部リンパ節腫脹は47%、扁桃腫大は43%にしか認められなくなり、診断はかなり難しいでしょう<sup>5)</sup>。

サイトメガロウイルスは伝染性単核球症の原因のなかでEBウイルスについて多いと推察されていますが、脾腫は認められるものの扁桃腺腫大や頸部リンパ節腫脹の頻度は少なく、さらに診断は難しいでしょう。急性HIV感染症を身体所見で疑うことは不可能と考えられています。したがって問診が重要となります。他の性感染症の既往(梅毒、淋病、コンジローマなど)、リスクの高い性交渉(同性間性交、HIV流行地での性行為など)、静注薬物使用などがHIV感染を疑うポイントとして重要です<sup>3)</sup>。

これらの既往歴、身体所見で伝染性単核球症を疑い、末梢血液検査、血清生化学検査を行います。末梢血液検査での異形リンパ球の出現は、陽性尤度比 10%以上で 11.4、20%以上で 26 とかなり信頼できる所見です。ただし異形リンパ球は自動機器では判読できず、臨床検査技師の目視が必要となります<sup>5)</sup>。診察時よりここまでの数時間で伝染性単核球症の拾い上げが可能です。

現在、当院でもインフルエンザをはじめとした風邪症候群が多く受診されていますが、インフルエンザ以外のウイルス感染症にも注意する必要があります。

平成 29 年 12 月 5 日

#### 参考文献

- 1) 森澤 友博ら：伝染性単核球症の口蓋点状出血．杏林医学 2017；48；11．
- 2) EB ウイルスによる伝染性単核球症が増加しています  
<http://www.nobuokakai.ecnet.jp/nakagawa24.pdf>
- 3) 急性扁桃炎—急性 HIV 感染症は鑑別できる？—  
<http://www.nobuokakai.ecnet.jp/nakagawa65.pdf>
- 4) 内藤 俊夫：伝染性単核球症．第 66 回日本感染症学会東日本地方会抄録 2017；72
- 5) 國島 広之：ウイルス感染症．日内会誌 2017；106；2367 - 2372．